

(5) 富士吉田市、桂川・相模川流域協議会合同シンポジウム

豊かな水の恵みを後世に一富士から始まる循環型社会—

日 時 2004 年 11 月 27 日 (土)

場 所 山梨県郡内地域産業振興センター 2 階研修室 (山梨県富士吉田市)

参加人数 山梨県側 45 人 神奈川県側 75 人 県外 5 人 合計 125 人

●概要

主催者あいさつ 萱沼 俊夫 (富士吉田市長)

〃 河西 悦子 (桂川・相模川流域協議会代表幹事)

神奈川県・山梨県知事メッセージ披露

基調講演 講師：駄田井 正 (久留米大学経済学部教授)

「川でつながる人とくらし—筑後川流域を事例として—」

パネルディスカッション・活動報告紹介

「流域の循環を考える—水は天下のまわりもの—」

コーディネーター 江尻 京子 (ごみ問題ジャーナリスト)

パネリスト (発表順) 駄田井 正

勝俣 源一 (めだかの学校校長)

倉橋満知子 (鳩川・縄文の谷戸の会代表)

齊藤 隆広 (東桂中学校教諭)

小川 昌三 ((財) かながわ海岸美化財団主事)

黒田 光秀 (㈱総合リサイクルセンター黒田代表取締役)

閉会あいさつ 小俣洋 山梨県大月林務環境部長 (桂川・相模川流域協議会代表幹事)

● 主催 富士吉田市、桂川・相模川流域協議会



駄田井正氏による基調講演



パネルディスカッション

●パネル展示協力団体（順不同）

北都留森林組合
山梨県環境科学研究所
カーカネットの会
桂川・東部地域協議会
富士燃料株式会社
田名・望地の田んぼとゲンジボタルを守る会
鳩川・縄文の谷戸の会
鳩川水辺の森の会
水辺の楽校
近隣の緑地を歩いてみる会
ふじよしだ環境市民会議

富士吉田市環境美化センター
よこはま水と森の会
相模川よこはま地域協議会
相模川湘南地域協議会
東京電力㈱山梨支店大月支社
富士に学ぶ会
（財）かながわ海岸美化財団
大月森づくりの会
めだかの学校
コープやまなし
NPO法人あさひファーム



【北都留森林組合】

今回は、ハイキングマップを中心に北都留森林組合の取り組みである林業体験教室などをご案内させていただきました。資料には北都留森林組合パンフと学校林活動（上野原小学校）を配布させていただきました。

HP : <http://kitaturu.hp.infoseek.co.jp>

【よこはま水と森の会】

流域での都市と農村との交流を支援します。
～都市コミュニティの中で、流域環境を考え行動する人の輪を広げます。森づくりに参加します。地産地消を進めます。～

かながわ県民活動サポートセンターの活動団体データベース

(<http://www.kvsc.pref.kanagawa.jp/db.html>)に紹介あり



【財団法人かながわ海岸美化財団】

神奈川県内の全長 150 km の自然海岸の清掃を実施するとともに、美化啓発活動、美化団体の支援、調査研究を行うことにより、海岸美化を図っている。

HP : <http://www.bikazaidan.or.jp/>

基調講演 講師：駄^ダ田^タ井^イ 正（久留米大学経済学部教授）

「川でつながる人とくらしー筑後川流域を事例としてー」

皆さん、こんにちは。本日の桂川・相模川の連携会議のシンポジウムに基調講演としてお招きいただきまして、誠にありがとうございます。非常に光栄の至りだと思っております。

私は今ご紹介いただきましたけれども、筑後川流域のいろいろな取組をやっております。今日は、われわれのやっております取組をお話しさせていただきまして、皆さんの今後の活動の何かの足しになれば幸いだと思っております。われわれのやっていることは、多分そのまま役に立つということはないと思います。やはりいろいろな事情がございまして、それぞれの所の事情に合わせて考えていかないと、よそがやっているからといってそのまま受け継ぐ、まねをしてやってうまくいくとは限りません。

今までの日本のいろいろな地域の地域興しだとか活動で、一番問題になるのはそこだと思います。よそがやっていていいからうちもその通りやろうとやって、うまくいかないという例はいっぱいありますので、われわれのやっている例をよく考えていただいて、この地域に合ったやり方でしていただけたらと思います。

まず最初ですが、このパワーポイントを主に。それから、私が今日お話しします大体の内容というのは先程コピーを配っていただきました。最後のほうでしょう、2枚目だと思いますが、「『この指とまれ式』で活動推進」とか「失敗が許される“特権”を生かし、面白いことはとりあえずやってみる」とか、そういうことの題材のコピーがあります。そこに大体粗筋が書かれておりますので、また後でお読みいただけたらと思います。

まず最初に、筑後川と言っても皆様あまりご存じないと思いますので、一応、この最初のパワーポイントの所に筑後川の写真を載せております。これ、インテルサットか何かで撮ったやつです。それをちょっと引っ張ってきたのですが、あまり画像がはっきりしていないので申し訳ないです。

筑後川というのは九州の北部のほうにある川でして、全長が大体約143kmでございます。源流は九重連山です。九重連山を源流にして、途中の日田と言う所がございますが、そこで二つに大きく分かれております。この筑後川というのは非常に特色のある川です。143kmと言いましたら日本の川の中ではそう大きい所では……。川の大きさとしましては、22～23番目ぐらいじゃないでしょうか。

ところが、先程市長さんのご紹介の中でも「筑紫次郎」と言われるように、「坂東太郎」、利根川の次ぐらいに昔から有名な川になっておりますのは、多分いろいろな原因があると思いますけれども、一つは非常に特色ある川だと。それから、人間とのかかわりが非常に深い。歴史的なかわりの深い川だということが原因ではなかろうかと思っています。

まず特色があるといいますと、上流と中流と下流というのが非常にきれいに特色を持っています。上流は山間部でございます。ああいうダムのある所です。中流は平野部でございます。下流のほうに行きますと平野であるというのはどこもあることです。筑後川の特色というのは下流でございます。

どこが下流の大きな特色かといいますと、ご存じのように有明海があるという。有明海というのは、干満の差が大体 5m ぐらいあるのです。そして下流のほうは、川の水は普通上から下に流れる、上流から下流に流れると言いますが、下流のほうは下から上に流れる。下流から上に流れる、すなわち、潮が逆流するわけです。

それで、筑後川の下流には水源を持たない川がいくつかあるのです。ということはどういうことかということ、入り江みたいなのが川になっておりまして、水源を持たない川があります。この筑後川の逆流というのは、下流から 20km ぐらいの所でございます。久留米市まで潮が上がってきます。そういうことで下流には非常に特色を持っています。

筑後川は、一つは非常に「暴れ川」とも言われまして非常に洪水の多い川ですが、一方で下流はそういう具合に潮が上がりますので、逆に水不足です。真水が不足して、水田の水を獲得するのが大変でございます。逆にまた雨の時期が多いときには、下流は洪水に見舞われる、その両方で苦しめられている所です。その両方をうまく解決する手段として、クリークが発達しております。

皆さん、柳川に行かれたこともあると思いますけれども、柳川もあれはクリークで、人が掘った所です。そのクリークで水のないときには真水をためて、それから排水の役割を果たすということで、非常に細かい小さな川、人が掘られた川がずっと下流にはございます。そういう、水に苦しめられ、かつ水不足でも苦しめられているという経験を持っている、そういう川でございます。

そして、この川は 143km、流域面積は 2,880km² ということですが、県で言いますと、佐賀県、福岡県、大分県、熊本県という 4 つの県にまたがっています。相模川は 2 県ですけれども、筑後川は 4 県にまたがった川でございます。

それから、人と川のかかわりが非常に古いといいましたら、下流のほうでは徐福伝説というのがございまして、秦の始皇帝の時に童子を 3 千人か何か連れて日本にやってきましたという、徐福が上陸したという伝説があります。それから、白村江の戦いの時に天智天皇が逃げて帰ってきて要塞基地にしたという所が、筑後川の中流でございます。

ということは、どうも今有明海はずっと干拓されてきまして干拓の歴史が古いのですが、干拓された結果、だんだん潮の干満の差が小さくなってきた。昔は 6~7m あったのではなかろうかと言っています。それで、中流ぐらいの所まで潮がさかのぼっていたのではなかろうかと言われております。かなり上まで、30~40km ぐらいまでは潮がさかのぼっていたのではなかろうかと。

川に潮がさかのぼるということは、水運には非常に都合がいいのです。潮が満ちるときには満ち潮に乗って上流まで船で入っていけますし、引き潮のときに潮に乗れば

さっと海に下りていけるということです。だから、そういう水運が昔から非常に発達した所だと言われております。そういうことから非常に歴史的にも人間とのかかわりの深い川でございまして、それが川の大きさがあまり大きくない割には、「筑紫次郎」というような名前で行われているゆえんでなかろうかと思います。

この筑後川の下流に大川市という町があるのです。大川市というのは、関東の方はあまりご存じないかもしれませんが、家具で有名な所です。家具の産地でございます。この大川の所には風浪宮と言う神社があるのですけれども、神功皇后がここから朝鮮への出兵をやったというあれが残っております。どうも昔から大川の下流、筑後川の下流というのはそういう大陸との貿易のいろいろな面の出先機関といえますか、出向地になったのではなかろうかと言われております。

それは別としまして、大川というのは家具の町で有名ですが、家具の原料になりました木材は筑後川の上流から切り出されまして、そして、いかだで流して下流まで送られてきております。このいかだ流しというのはずっと続いておりまして、現在はもういかだ流しはございませんが、40年ぐらいまではまだいかだ流しというのはあったと言われていたのですが、上流から下ってきた木材で、それをもとに船とか家具を造ったということで、そういう意味では上流と下流の交流が、筑後川を介して非常に盛んであったと言われております。

面白いことに、意外と筑後川の上流のほうに下流の方がお嫁さんに行っているのが多いのです。結婚しているのが多いです、下流と上流の結婚。これは、どうも船頭さんは上からいかだを流していかだを持って行って、帰りは嫁さんを連れて上流に帰ったんじゃないかというようなことを言われていまして、そういう話が残っております。

上流と下流の交流というのは、意外とあった。むしろ上下流の交流のほうで盛んであって対岸同士の交流、川を渡った対岸同士というのは、何かこれは非常に争いの多い、水争いとか何かの多い所であって、対岸よりも上下流の交流のほうがあったという話を聞く所でございます。

ここでわれわれのこの流域連携の活動ですが、そもそもこの筑後川の流域の活動をいろいろな点から展開しようという考え方が出てきましたのは、実は最下流の大川からです。というのはどういうことかといいますと、大川というのは家具で栄えた町です。ところが、家具は今非常に不況です、売れない。20何年前ぐらいから家具というのは大変な不況産業になっているのです。そして大川の町もそれに準じて寂れてといいますか、活性化しなくなってきたのです。そういうところでもう一度大川の町の活性化を取り戻すためには・・・。

大川が40年ぐらい前から上流からの材木で家具を作らなくて輸入材に頼ったりしておりました。そして上流と下流のきずなというのは切れていたのです。それで、もう一度上流と下流とのきずなを取り戻そうじゃないかということで、大川の青年会議所の方たちが中心になりまして、「筑後川フェスティバル」をやろうじゃないか、筑後川の流域の人たちがもう一度集まって昔のきずなを取り戻すような、そういうお祭りをしようじゃないかということが発案されました。それで、そこの大川の人たちが中

心になってフェスティバルが始まりました。

最初の第1回目が1987年に大川市で始まりました。今年で第18回目を迎えております。流域全体のお祭りを、流域をあちこち回りながらです。2回目は小国町です。小国といいますと、これは一番上流で熊本県の上流の所ですけども、そこから日田市とか、ずっと持ち回りで18回を数えております。来年で19回目になるのですが、20回目はもう一度また大川でやろうというような話をしているのですが、こういうフェスティバルから始まりました。そして、流域にかかわるいろいろな問題を話し合おうということになりました。話し合ったり、情報を交換しましょうということになったのですが、このフェスティバルだけでは・・・。

これは1年に1回集まって実行委員会形式でやるわけです。そして、持ち回りでそれぞれフェスティバルを開催していくのですが、祭りのときはわーっと盛り上がるわけです。例えば2日か3日間かけて流域全体から集まっていろいろな催しをやるわけですけれども、必ず「夜鍋談義」というのをやるのです。夜っぴいて酒を飲もうと。夜から朝にかけて、一堂に集まって流域のいろいろな活動をしている人で集まって、車座になって飲み会をやるというようなことをやるのです。

1年に1回集まっていろいろな問題を出し合ったりして話をするのですが、それで終わってしまうのです。わーっと言って終わってしまう。それでは継続的な活動はできないんじゃないかということになりました。だから、何か継続的な活動をするには恒常的な組織を作らなくては行かんではなかろうか、お祭りではぱっとやっているだけでは行かんではなかろうかということで、「筑後川流域連携倶楽部」というのを発足するようになりました。

この筑後川流域連携倶楽部を発足するにあたっては、私は久留米大学にいますが、久留米大学の産業経済研究所というのがございます。これは筑後川流域にある大学と致しまして、筑後川流域としての色々な活動に取り組んでいます。産業経済研究所でいろいろ、筑後川流域の問題とかいろいろ研究とかやった成果を公開講座というカタチでずっと公開して参りましたのですが、その所にフェスティバルをやっていた人たちが参加するようになりまして、それでわれわれの大学のスタッフとそういう実際のJCだとか、あるいはその他の活動団体とかいう人たちと交流するようになりまして、それで恒常的な組織をとということで、筑後川流域連携倶楽部というのを作りました。

いきさつから私は理事長に選ばれたのですが、1999年ですか、特定非営利法人の法律ができて、法人化をしていたほうがいだろうということでNPO法人の資格を取りまして、1999年の6月からNPO法人として発足しているわけでありまして。

この筑後川流域連携倶楽部の特色というのは、筑後川流域にいろいろな活動グループがございまして、そういう活動グループの一つのネットワーク、グループと個人のネットワークでございまして。大体、流域連携倶楽部は個人会員と団体会員がございまして、個人として入っておられる方が大体200人ぐらいです。団体が50団体ぐらい登録しておりまして、この中でネットワークということでいろいろ行動しております。

このネットワークの特色といいますのは、普通の企業とかああいいう組織と違いました、意思決定をやる場合に全体の合意というのは得ないのです。「みんなでこうしましょうか」と言ったときに、反対だとか何とか出てくるとそれを説得するのが大変なのですが、そうではなくてネットワークですので「この指留まれ式」で、ある団体とか何かが「こういうことをやりたい」ということを提案したら、それに賛同する人、賛同する所が集まってやり出していく。全体で「こうやりましょう」と決めてやるのではなくて、そういう「この指留まれ式」でいろんなことをやっていくという方式を採っております。

だから、アイデアが良くてそれがいいというのであったら賛成者が徐々に増えていきますし、もしやっていることがあまり大したことがなければ、結局廃れてしまうということになるわけです。だから、意思決定をやりながら同時に実行していくという、非常にそういう・・・。

普通、いろんなことをやるときに、全体の意思を統一するのに非常に時間がかかります。それで精力を使いまして、これから何かをやろうというときに元気がなくなっているということがよくあるのですが、ネットワークで「この指留まれ式」でやりますと、そういう点にはあまり苦労しなくて済むということになります。素早く実行できることになるわけですが、そういう運営方式をしております。そういうネットワークでやりまして、そして、それが非常に実績が上がってくるものであれば連携倶楽部から一応組織を分離して、それだけ独立して行動する、やっていくということをしております。

その事例はまたあとでお話し致しますが、このネットワークで一番大事なのは情報の共有です。皆さんにネットワークを組んでおられる人たち、あるいはいろいろな人たちに情報が行き渡らないといけない。流域全体でいったいどのようなことが行われているのかという情報が行き渡る必要があるのですが、流域全体で情報を共有するのはなかなか難しいのです。

といいますのは、先程言いましたように筑後川の流域というのは4県にまたがっているわけです。だから新聞の地方欄も全部違うわけです。下流の版は上流のことを書いていませんし、上流の新聞の地方欄は多分下流のことはほとんど書いていないわけです、書かれておりません。そういう意味で流域全体の情報を集めたというようなことが必要ではなかろうかということで、今日皆さんのお手元にお配りしております「筑後川流域新聞」と言う、これを発行しております。

これは隔月で2ヶ月に1回発行しておりますして、流域全体での情報の共有ということで、「流域ではこんなことが行われていますよ」というようなこと、それから、ネットワークを組んでおりますいろいろなグループの活動もこの中で紹介していくということをしております。これは大体2万部印刷しておりますして、ちょっと申し遅れましたけれども、流域の概念というのはどういうふうにとらえるかがいろいろあるのですが、「筑後川の水を利用している所」というふうにまで解釈致しますと、実は福岡市の水道水の約半分は筑後川から参っておりますので、そういう意味では福岡市も筑後川

の流域ととらえられるというように思いまして、福岡市にもこの新聞は配っております。

今のところこの新聞の発行については、国だとか地方自治体のいろいろな協力を仰いでいるわけですが、私自身、この新聞はこれだけでひとつ独立した新聞事業としてなれるようなものにしたいと思っています。一応値段は 50 円と付けておりますけれども、できたら 100 円ぐらいで売れるように、これがコンビニだとかどこかでも売れるようにして独立の事業として展開できたらと。それで、これで得た収益を活動に回すとか、参加団体に配るというようなことをしていきたいと思っています。

それから、今のところまだ広告を入れていませんが、広告なんかも積極的に入れていきたいと。入れてそういう、これでもって活動の収入を得たいと思っています。これを充実させながら、同時に情報の共有ということをやってきたいというふうに思っております。これがわれわれの組織の趣旨と、やっている仕事のことになると思います。これが新聞です。

次に「筑後川まるごと博物館」というのを事業としてやり出しました。やはりわれわれがこの活動をやる際には、やはり筑後川の流域というのはどういうものであるかということをよく知らなければいけない。先程ちょっと食事をしながら皆さんといろいろ話をしたのですが、意外と地元の人はいいろいろある地元の宝を知らないのですね。

例えば、昨日ちょっとホテルに泊まって、夜ちょっとバーに行ってバーテンさんとちょっと話をしたのですが、「この辺りは何もない」と。「富士山しかない」とか言うわけです。冗談じゃない、富士山というのはものすごい財産です。毎日富士山を見ている人は、こんなのは当たり前でつまらんものだと。つまらんことはないでしょうけど、当たり前だと思っていますけれども、これはよそから見たら非常にすごい宝物です。

よく観光とかに行かれたときに体験されていることだと思いますが、山奥の温泉に行ったときに食事に海の幸が出される。タイの刺身だとかマグロの刺身が出されてがっかりするということがあると思いますが、あれも一つの情報の認識の違いなのです。山奥の人にとって、海の幸というのはものすごいぜいたくです、ものすごいごちそうなのです。だから、山奥でお客さんにそういう海の幸を出すといったら、非常に歓迎していることになるわけです。

ところが、都会の人はそんなのが来てもそんなに歓迎にならんわけです。それよりも山の幸を出してくれたほうが非常に感激するわけです。ところが、山の人も毎日それを食べているからそんなものは当たり前のことで、どれだけ価値があるかというのは分からないわけです。

だから、意外と自分の住んでいる所に、自分たちは普段、「こんなものは」と思っているものが、実は非常に大きな宝物であるということ。それはやっぱり歴史的な経過だとか色々なことをもう少し勉強してやることによって、学ぶことによって価値が分かるのではなからうか。そういう意味で、筑後川の流域にいろいろあるものをもっと知る必要があるだろうということから始めた事業が、「筑後川まるごと博物館」という。

これもどういふことかといいますと、筑後川流域全体を一つの博物館にしてしまおうと。ここで言ったら、富士山を全部博物館だと考える。普通の博物館というのはどこかの建物にもものを入れて展示するというものですが、全体を一つの博物館と見なし、そこにあるいろいろな重要な、歴史的な遺物とか自然というものを、その場所でそれを見て学ぶというようなことをやろうという考え方です。これは英語では「フィールドミュージアム」と言うのですが、このごろの博物館の考え方がこういう考え方のほうにだいぶん出てきているみたいです、最近はこの考え方が増えてきたのです。

筑後川流域にはいろいろな面白いものが点在しております。例えば中流のほうに、この筑後川新聞の第何号だったですか、初夏号です。29号の開いた所に「ぐりり筑後川1」と書いてありますが、その所の写真に三連水車の写真が出ておりますが、これは江戸時代の中期に作られた水車でございまして、これがずっと今まで使われてきています。実際、畑にこれで水を入れて、江戸時代の中期ぐらいからずっと使われている水車でございます、こういうものがあつたりですね。

あるいは、筑後川にはいろいろな堰がございまして、その堰でも昔の形式を残している堰があります。今の堰というのは、大体川に直角にセメントで堰を造って水を取り入れるのですが、昔の堰は斜めに切っているのです。自然石とか何かでやりますから、水の抵抗を少なくするのに斜めに切った堰だとか。そういうのが江戸時代の中ごろから残っているようないろんな遺跡もあつたりします。

それから、こちらで言いますとこの辺りになりますか。日田の上のほうに小鹿田と言う所があるのですが、これは焼き物の里で陶磁器を作っている所です。ここは江戸時代の工法そのままに一つの地域が、小鹿田地区と言うのですが、そこは江戸時代の作り方をそのまま残しているのです。ずっと工法を残しているような所があります。羽根木と言う、水をためて木を下ろすようなやつで土を砕いて、そういうのをやりながらやっている所とか、いろいろ面白い所が残っておりますので、全体を一つの博物館というように考える。

博物館であるためには、学芸員が必要です。そういういろいろなことを研究する人です。その学芸員の養成をやっております。これは私どもの久留米大学と一緒にしながら一緒に合同で筑後川に対するいろいろな講義を、学芸員養成講座というのをやります。そしていろいろな人に勉強していただきます。「学芸員になりたい人」ということで公募しております。そして養成講座を受けて、そしてちょっと試験を致します。それで合格した人は学芸員と認定しまして誠にいろいろな活動に参加していただいております。今のところ33名の方が学芸員として登録しております。これはいろいろな人がおられます。若い学生から中年の方、それから最近増えてきましたのは、一度退職された人が、もう一度地域のことを勉強したいというようなことで学芸員を希望されて来られる方、いろいろおります。

この学芸員のまると博物館の事業は3年目を迎えます。最初は連携倶楽部の活動の一端として始めたのですが、この活動は大体定着しましたので、筑後川まると博物館は一応筑後川流域連携倶楽部の組織から切り離して、学芸員を中心にして独自に

運営していただいております。こういう活動であります。

これは学ぶことですが、学びがあれば遊びがなかったらいかんだろうということで、お手元にもコピーがあると思うのですが、「筑後川まるごとリバーパーク」と言う構想です。先程は、筑後川流域全体を一つの学びの場にしてしまおう。今度は、筑後川流域全体を遊びの場にしよう。

最近、国土交通省も考え方が変わりました。昔は川といったら治水と利水だけしか考えなかったのですが、最近は河川の多目的利用といいまして、川でいろいろ遊んでもらおうじゃないかと、川を学びの場にしようじゃないかというふうな、河川の持っている多機能を利用しようと。これは筑後川流域全体を一つの遊びの場として考えようということです。そして、できたらこれを観光資源にしたい。遊びの場として、ツーリズムの場として提供していきたい。普通のツーリズムと違って、先程の筑後川流域のいろいろ持っています特色、文化とかそういうものと関連付けながら川を楽しむ、あるいは流域のいろいろな文化をも楽しむというものにしていこうという考え方があります。

こういう遊びの場として考えたときに、非常にわくわくして楽しくするためには、あまりいい例えではありませんが、流域全体を一つのテーマパークのように考えようではないか。流域、地域にそれぞれの特色を持っているので、その特色をできるだけ活かしたような視点からその地域をもう一度見直して、できたら観光開発をやる場合でも、その特色からやっていこうではないか。全国いろいろの観光開発をやる時の間違い、何か金太郎飴のような、どこも同じようなことをやるのはいけません。そうではなくて、それぞれ特色を持った、それぞれの地域の持っている特色を生かしながら地域作りをやっていく必要があるのではないかとということです。

これは多分に私の独断なのですが、11のゾーンに分けております。いろいろ面白いゾーンがあるのですが、この中では既に全国的に観光地として知られている所がございます。例えば1番目の筑後川水源の自然と温泉です。そこでいい所は有名な黒川温泉とか。最近温泉ではどこが人気あるかといったら黒川温泉と非常に言われます。黒川温泉だとか温泉がいろいろあります。ちょっと離れますと由布院があります。

それから、10番の柳川は掘割で有名な所です。11番が吉野ヶ里で知られる所です。既に全国的にかなり知られている所もありますが、まだ知られていない所もいろいろありますので、こういうのを特色付けながらやっていこうという企画であります。これに2年ほどかけて、それぞれのゾーンを楽しむモデルツアーを計画して実行しました。そのうち6つぐらいを選んでやったのですが、その一端をちょっと紹介します。

これは、6つの企画をやったのです。これは実行した6つを書いているのですが、1つは下流のほうです。有明海の潮干狩りと水郷の柳川を楽しむツアーをやりました。先程有明海の特色をお話ししましたが、潮干狩りをやりました時に面白かったのは、有明海の潮干狩りはどういう潮干狩りか。皆さん、普通潮干狩りといったら、浜辺に出て、潮が引いた所までちょこちょこっと行って、掘って、また帰ってくるのですが、有明海ではそうではなくて、潮がまだ満ちているときに船ですっと沖合まで出るので

す。そうすると、潮が引いたら、その船がぼーんと沖合で干潟の上に乗ってしまうのです。完全に潮が引いて、船が海底に着くのです。そこで降りていって、潮干狩りをやる。

これは子供さんが海の真ん中で、この後ろに見えている棒はのりを養殖するやつです。これは4月ごろだったのですが、のりはないのです。本来今ごろだったらずっとのりが作られている所ですけども、そこで潮干狩りをしました。これはうっかりすると、潮が満ちてくるのを知らないでやっているとおぼれてしまうのですが、乗って、潮干狩りをして、柳川まで帰りました。そして、柳川の料理をいろいろ楽しんだのです。

有明海は非常に面白い魚がいたり、ムツゴウロウと言うのは聞いたことがあるでしょうけれども、独特の魚がおります。料理もいろいろな独特の料理があります。一番特色がある料理といたら、イソギンチャクを食べる。イソギンチャクの料理だとか、ウミタケと言う変な魚がいっぱいいるのですが、そういうのを食べました。

明くる日は、柳川はひな祭りで有名なのです。これが柳川の下げ物と言いまして、ああいうおひな様と下げ物を各家で飾るのです。ちょうど3月、4月ごろ見て回るといようなことを、潮干狩りをやりながら、昼ご飯はウナギの蒸籠（せいろう）蒸しを食べるという。そして、ちょうどこの日は流しびなをやった時なので、掘割で船に乗りながら流しびなをやったといようなツアーです。これが柳川のツアーであります。

これは中流の所です。甘木とか朝倉とか言う所です。先程の三連水車のある所です。これは中流の所ですが、どういうことをやったかという、秋月と言う所がありまして、ここは水のきれいな所で草木染めをやっている人がたくさんおりまして、秋月で草木染めを体験しました。これは皆さん、行った人たちが自分で染めたこれを見せているところです。草木染めを楽しんでから筑後川のほうに下りてきまして、三連水車を見たりしました。

その三連水車の周りはフルーツがよく取れる所です。山梨県はブドウで有名でしょうけれども、この筑後川の中流も巨峰で有名な所です。最近ではリンゴもやっています。それから、柿が有名な所で、名産です。これは夏でしたので柿はありませんが、観光農園でそういう果物を取って、三連水車を巡りました。

それから、この近くに原鶴温泉と言う温泉があるのですが、その温泉に入りました。そこは鵜飼いがあるのです。今、全国で鵜飼いをやっている所が7つくらいあるのです。鵜飼いと言えば長良川が有名ですけども、九州では筑後川に2ヶ所鵜飼いをやっている所がございます。鵜飼いを見物して帰るということです。これが一つのツアーです。

これは上流のツアーを一つ企画しました。これは上流に行きまして、上流は森林の山なのです。写真は出ていませんが、山で枝打ち体験をやりました。そして、山で泊まりまして、蕎麦（そば）打ちをやったりしました。明くる日は溪流に行きまして、溪流釣りをやって、溪流で魚を食べています。

そして、この近くに金山の跡がございまして、鯛生金山と言う所です。今は閉山し

ているのですが、そこで砂金採りをやらせているのです。あれは学生ですが、一生懸命砂金を採っているという、こういうツアーです。こういうのをやらせています。

だから、こういう自然を楽しむような体験を必ず入れて、かつ面白く、できたらその名物を食べるというツアーを、それぞれの地域の特色を生かしたようなツアーをやっていくということを考えて、これがまるごとリバーパークであります。まだまだいろいろな企画があるのです。例えば筑後川の川下りなども、久留米から有明海までずっと下るツアーというのも考えております。

こんなことで悪口を言ったらちょっとあれなのですが、私はディズニーシーに行ったのです。ディズニーシーに行って、ゴンドラに乗ろうと思ったら40分ほど待たされました。乗れば10分ぐらいで終わりです。あんなのに何でそんな高い金を払って行くのかと不思議で仕方がなかったのです。しかも、作り物である。

筑後川だったら、景色を楽しみながら2時間か3時間ぐらいずっと船で下っていけるわけです。そういうツアーが楽しめます。ですから、非常に本物を楽しめる。川全体、地域全体を一つに考えれば、本物を楽しめるテーマパークになるのではなかろうかというふうに考えております。

これはちょっと話が違いますが、何といてもわれわれが活動していくときにはお金が要りますので、どうやって資金を調達するかということで、これは資金調達の1つの方法としてやったのです。あまり成功していないのですが、実は筑後川カードと言うクレジットカードを作りました。私も持っているのですが、何でもこれで払うのです。これを作りまして、これで決済しますと0.3%がカード会社からわれわれの所に入ってくるわけです。それを何かに使おう、いろいろなものに使っていこうという、カード会社との提携をやっております。

次、これは地域通貨です。今、話題になっています地域マネーです。エコマネーとも言ったりしておりますが、地域通貨を今、流域連携倶楽部が中心になって使おうと。

先程言いましたように筑後川フェスティバル、お祭りをやります。お祭りをやる時に、いろいろボランティアに来ていただきます。ボランティアのいろいろ運営スタッフがいますが、スタッフに少なくとも弁当だとか交通費ぐらいは出さないといけません。交通費は実費で払わないといけないでしょうけれども、イベントがあったときにスタッフの弁当をどう手配するかとか何とかというのが非常に大変なのです。そんなことはもうやめてしまおうと。その代わり、弁当代を地域通貨で払おうではないか。そして、地域通貨を受け取ってくれるどこか好きなレストランで勝手に食べろと。そのときでなくても、またあとでもいいから食べられるようにするということをすればいいのではなかろうかということでやっています。

それから、実は私は今日の謝礼を現金でもらいましたが、講演会とか何かに来てもらったり、どこかから呼んできてシンポジウムなどをやったときの謝礼を円でやりますと、別の所で使うわけですが、もし地域通貨で払えば、そこでしか使えませんから、地域の振興になるわけですね。だから、まずわれわれは冗談で「フェスティバルでやるときには、いろいろ講師とか何か呼んだときの謝礼は、皆、地域通貨で払おうか」

という話をしているのです。そういうものだとかにそれを使ってやっていこうではないかということをやっております。

われわれの地域通貨は、カップにちなんでカップマネーと言う名前を付けているのです。1 カップが 100 円で、5 カップと 10 カップの金を出しております。これがこの流域で引き取ってくれる所の一覧表であります。

これで面白かったのは、いろいろな所があるのですが、最初に乗ってきていただいた所は旅館です。最初は使用の限定がありました。例えば、風呂に入るには使ってもらいたい。入浴料 500 円とか何かあるのです。それを地域通貨で引き取りますよと。これは旅館にしたら、別に風呂に入ってもらったってコストがかかるわけではないから、ついでにビールでも飲んでもらったらもうかるようなので、そういうところで乗ってきました。

その後だんだん増えてきました。面白いのは、グリーンコープが「付き合ひましょう」ということで付き合ってくれるようになりました。それから、美術館です。石橋美術館があるのですが、こういう所とかが出てきております。

これは次の 40 ヶ所ぐらいです。面白いのは、福岡には中洲と言う繁華街があるのですが、そのスナックでも使えるようにいろいろとやりました（笑い）。

これは、筑後川にあるいろいろな問題の相談会を、大学中心にやっているということでございます。

次はこういうことです。私は筑後川にあるいろいろな物産を筑後川流域のネットワークでいろいろやろうということを、今、企画しております。これはリバーマーケットです。基本的な考え方はどういうことかといいますと、やはり遊びと学びと仕事の 3 つをやはりうまく結び付けていかなければいけないのではないか。ボランティア活動とかで長く続いている所は、やはり楽しくやらなければ続かないということです。

楽しくやる。だから、遊びがなければいけないだろう。それから、その中で学んでいかなければいけないだろう。しかも、それはやはり仕事に、何か収入とかにある程度結び付けていく必要があるだろう。だから、遊びと学びと仕事の一体感を実現するようなやり方でやっていかないといけないだろうということで、今のところ、一つは学びの場としての筑後川まるごと博物館と、遊びの場としての筑後川まるごとリバーパーク、ここにこれから先程の地域通貨といろいろなものを結び付けて、いろいろ物産の販売とも結んでいきたい。地産地消を進めるようなものと連携させていきたいということを今、考えております。

考えていることは、地域の特産をインターネット上に載せて、例えば楽天に出店しても、アクセスしてもらうのは非常に大変なことです。もし「筑後川リバーマーケット」という一つのドメインを作れば、「筑後川」でアクセスすると、そこで地域の特産が全部出てくる。そういうくくり方をやりながら、このマーケットに参加してくれる人たちに、多少ともわれわれの活動に協力してもらうことが大事ではなかろうかと思っております。

最後になりましたけれども、やはり環境保全と経済の振興の両方をやはり同時に実

現するような方法を考えていかなければいけない。そして、環境を良くすれば良くするほど経済も豊かになるのだという仕組み作りをやっていくべきだろう。

例えば、その一番いい例がツーリズムではなかろうか。それ以外もいろいろあるでしょうけれども、ツーリズムというのはやはり環境を良くすることがお客を呼ぶことなのです。例えば柳川の掘割、柳川の川下りなどを見ていただいたら分かると思いますが、柳川の川がきれいでないとか客は来てくれません。にょいのような川、汚いものが流れる所で周りの景観も悪ければ人が来てくれません。

だから、そういうのを大事にすることで地域に人が来てくれるようになりますし、同時に、人が来てくれれば、そこにいろいろなもののビジネスチャンスが出てくるわけですね。そういうのと結び付けながら、私は、環境と経済は必ず両立するものだと思いますし、両立させなければいけないものではなかろうか。だから、そういう仕組みをどう考えていくかということが大事ではなかろうかと思っています。長い間、どうもありがとうございました。

流域シンポジウム

1995 年度～2004 年度実施状況

①桂川・相模川流域の交流と連携の序章
1996 年 3 月 16 日 大月市民会館

⑤桂川・相模川の水をきれいにするために
～石けんと合成洗剤を例として～
2000 年 3 月 5 日 都留市文化会館

⑦相模湖を知ろう・遊ぼう・体験しよう
2001 年 11 月 18 日 相模湖交流センター

④桂川・相模川を美しくするために
～流域のゴミ問題～
1999 年 3 月 7 日 相模原市けやき会館

⑧森・川・海との新たな交流・連携
～市民参加による流域の森づくり
と上下流交流の促進～
2002 年 12 月 8 日 大月市民会館

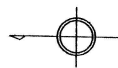
⑨清く豊かに川は流れる
「蛇口の向こうの森を考えよう」
～飲み水はどこからどこへ～
2003 年 11 月 8 日 横浜情報文化センター

⑩富士吉田市、桂川・相模川流域協議
会合同シンポジウム
豊かな水の恵みを後世にー富士から
始まる循環型社会ー
2004 年 11 月 27 日 山梨県郡内地域産
業振興センター

③流域環境保全プログラムの発信
1998 年 2 月 14 日 海老名市文化会館

⑥清く豊かに川は流れる
～飲み水から桂川・相模川流域を考える～
2000 年 11 月 23 日 寒川町民センター

②上下流からの発信
1996 年 11 月 23 日 富士五湖センター



0 2 10km

(6) 上下流交流事業

「相模川・海から川を考えよう！」

◆ 湘南スタイルにリニューアルされた神奈川県水道記念館と新江ノ島水族館を体験

実施日：2004年10月23日（土）夜半は風強く、台風一過の秋晴れ日和

集 合：9:40 水道記念館前広場

解 散：16:00 新江ノ島水族館

参加者：神奈川県側より平塚市の松原小学校生徒や市民90名のほか、茅ヶ崎・横浜市民の6名、山梨県側より大月市の鳥沢小学校生徒46名が参加。総勢142名

当日は、奇しくも台風23号による記録的豪雨により、バスの水没など各地に被害をもたらした直後となり、また夕方17時56分には新潟県中越地震に見舞われた日になり、罹災地の方々には心からお見舞いを申し上げ、レポートとします。

そんな訳で予定していた茅ヶ崎市南湖浜での地引き網中止の申し入れにより、総勢142名の一行はバス3台に分乗して、寒川町の神奈川県水道記念館に集結しました。主催者代表各位より、桂川・相模川の豊かな水とそれに繋がる相模湾の恵み体験に参加した喜びと交流会の意義についてお話があり、体験見学に入りました。ここは、相模川河口から約6.5km上流左岸の寒川取水堰から取水する県営寒川浄水場の前身の施設の一部を活用して2004年3月にリニューアルされた。水源のこと、水の働きや性質、水道の仕組みなどを遊びながら楽しく学習できる展示にはしゃぎました。

陽光きらめく湘南海岸をドライブして次に訪れた新江ノ島水族館も、2004年4月に内容が一新されて、江ノ島を背景に明るくまぶしい湘南の海に溶け込んだ近代的ゴージャスな雰囲気になっており、心が弾みます。ここでの見ものは、館内に入ったとたんに正面水槽に打ち当たる波の轟音、直径15m、高さ9mの大水槽に群泳する大小の魚類、他では見られない、くらげワールドと本邦先駆と言われる華麗なイルカショーなどなど大満足のマリンランドではありました。

（報告者 宮崎 俊一）

上下流交流事業

1998年度～2004年度実施状況

